

成人遷延性および慢性咳嗽患者,喘息患者における百日咳抗体価(抗PT抗体)の検討

竹田知史 新実彰男 松本久子 伊藤功朗 山口将史 松岡弘典 陣内牧子 大塚浩二郎
小熊毅 中治仁志 三嶋理晃
(京都大学 医学部 呼吸器内科)

【背景】成人百日咳患者の増加が指摘されている。また欧米では百日咳は2-3週以上持続する成人咳嗽患者の原因の13-20%を占めると報告されている。

【目的】成人遷延性 (3-8週) および慢性 (8週) 咳嗽患者,喘息患者における百日咳菌感染の関与を検討する。

【対象と方法】2007年1月-6月に当科喘息・慢性咳嗽外来で抗pertussis toxin (PT), filamentous hemagglutinin (FHA) IgG抗体を測定した165名を対象とし、抗PT IgG抗体 ≥ 100 EU/mlにて百日咳菌感染症と診断した (de Melker et al. J Clin Microbiol 2000; 38: 800-6)。

【結果】遷延性咳嗽33例中1例,慢性咳嗽35例中2例,有症状喘息97例中6例で上記診断基準を満たした。遷延性咳嗽の1例と慢性咳嗽の1例は感染後咳嗽の病像を呈し,抗菌薬と中枢性鎮咳剤の処方では咳嗽は軽快した。慢性咳嗽の残る1例は咳喘息が百日咳菌感染により増悪したと考えられた。喘息の6例は全例が感冒症状に続発して喘息の悪化をきたしており,喘息の治療と一部では抗菌薬を併用して軽快した。

【考察】百日咳菌感染症が遷延性および慢性咳嗽の一部の症例で咳嗽の原因となることが示された。また喘息の増悪因子として考慮する必要性が示唆された。